

羊飼

TOBU

NO. 49 26 XII, 1984

百万石蝶談会

HYAKUMANGOKU-TYODANKAI

ユキワリツマキチョウ飼育記録 (中間報告)

金平永二

ユキワリツマキチョウという名はクモマツマキチョウ (*Anthocaris cardamines*) と、ツマキチョウ (*A. scolymus*) との雑交 F1 につけられた通称である。手許に適当な文献がないために正確なことはわからないが、今までに野外で自然雑交と思われるものが数例、実験的雑交とおもわれるものが数例 (大野義昭) 報告されているという。今回、*A. cardamines* ♀ × *A. scolymus* ♂ の組み合わせにより実験的雑交を試み、F1 不全羽化 2 例と、越冬が期待される蛹 5 例を得たので、それらの経過を中間報告としてまとめておきたい。

<材料>

A. cardamines ♀ : 1983年6月の岐阜県産卵を金沢市にてイヌガラスを中心とする代用食で飼育、通常の方法で越冬させたのち、野外産 *A. scolymus* ♂ の出現と歩調をあわせるべく 5°C の冷蔵庫にて保管。4月末再び室温に戻し 5月9日午前中に羽化。

A. scolymus ♂ : 1984年5月10日金沢市近郊卯辰山で採集した 8♂♂ の交尾器を観察し、一番良く *valva* を開く傾向にあったものを用いた。

<交配方法> 1984年5月10日

材料の蝶は操作しやすいように、それぞれ小型のクリップにて翅を固定した。室温 22°C、15W × 2 の蛍光灯下にて両方の交尾器を接触させた。それぞれの腹部長軸のなす角度はおおよそ 80° であった。♂ は強い反応を示し、♀ の腹端を *valva* で把握しようと試行し始め、おおよそ 1 分後 *valva* の動きが止まり、腹部を波打たせるように蠕動し始めた。接合に成功したものと判断し、クリップをはずし雌雄を水平な板の上に放置した。交尾開始は午後 3 時 1 分。26 分後、交尾は終了し雄は雌から離れて歩き出した。交尾後の雌はタネツケバナをいれた 30 × 30 × 40cm のケージに室内で保管した。

<産卵> 5月11日~17日

交尾 1 日後の 5 月 11 日、午後 1 時 40 分、試験的にケージを日向に出したところ続けて 3 卵をケージ内のタネツケバナ花柄に産卵。この時の気温 23°C。次に室内で VTR 用 300W の光源を用いて気温 25°C に調節したところ 1 時間で 5 卵産卵。このようにして初日は合計 8 卵の産卵をみた。栄養は市販蜂蜜 10% 水溶液を用いた。同様の操作で 5 月 11 日から 17 日にかけて表-1 の如き産卵結果を得

た。卵が橙色に変化したものは有精卵とした。有精卵のうちフ化できなかったものが3例あったが、いずれも卵内で外見上ほぼ完全な初令幼虫が形成されていた。有精卵産卵数は46/53で86.8%、全産卵数に対するフ化率は43/53で81.1%であった。母蝶の死亡はおそらく不注意によるものと思われる。解剖により20卵以上の卵ないし卵基が見出された。

表-1

日	産卵数	有精卵	フ化数
5月11日	8	5	5
12日	10	9	9
13日	7	6	5
14日	8	7	7
15日	8	8	7
16日	4	3	3
17日	8	8	7
合計	53	46	43
	7.6卵/日	(86.8%)	(81.1%)

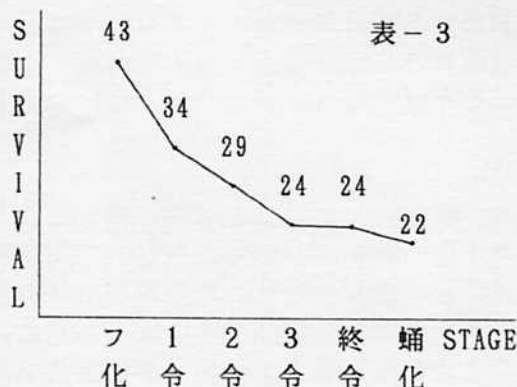
<幼虫期>

食草として、金沢市に自生するタネツケバナ、ジャニンジン、イヌガラシを与えた。卵期は4日~8日、幼虫期は15日前後で、対照として育てた野外産ツマキチョウの経過と比べて有意の差をみない。表-2に3例の飼育経過を示す。

表-2

産卵	フ化	第1起	2	3	4	蛹化	卵期	幼期
5/11	5/15	5/18	5/20	5/23	5/25	5/30	4日	15日
5/11	5/18	5/20	5/23	5/25	5/28	6/2	7日	15日
5/12	5/17	5/20	5/23	5/25	5/27	6/1	5日	15日

全幼虫期を通して21例の死亡をみた。幼虫期の死亡率は48.8%と明らかに高い。昨年全く同じ方法で野外産 *A. cardamines* を卵から飼育した時はおよそ70例中幼虫期にはほとんど1例も死亡しなかった。技術上の問題に今回の死亡原因を求め得る可能性は小さい。1令時の死亡はいわゆる食草に食いつかなかった例がほとんどである。2令時、3令時のものも、それまで順調に経過してきたものが突然摂食を止め、動きがなくなり数日後食草より落下して死亡しているといったエピソードであった。終令で死亡した2例は、茶色に変色してあたらかも融解



するように死亡したもので、ウィルスなどによるものかもしれない。

表-3として生存曲線を表した。

<蛹期と羽化>

A. cardamines も *A. scolymus* も蛹で越冬し、翌年の春羽化するが、これらの雑交F1では蛹期が著しく短く、蛹化した夏のうちに羽化することが知られている。

5月30日から6月7日にかけて蛹化した22の蛹を通風良好な場所で保管した。早い例では蛹化後およそ1週間で不透明化が始まり、10日後には前翅端の橙色班を透視できるようになった。羽化前兆の発現には非常にばらつきがみられ、このように1週間で始まるものもあれば、現在(同年10月)になってもまだ変化のないものもある。

現在までに2例の不全羽化をみた。第1例は6月6日蛹化したもので14日の蛹期を経て6月20日羽化した。この例では頭部と脚を含む胸部の1部のみが脱殻し、残る胸腹部と翅は蛹殻内にへばりついていて、人工的に剝離したところ翅には橙色の班紋があり、交尾器も♂のものであった。第2例は、6月2日蛹化し、20日間蛹期を過ごし6月22日に羽化した。この例では頭胸部および翅までは殻の外に出ていたが、腹部が脱出できない様子だった。これも班紋、交尾器とも♂であった。

22の蛹は次々に羽化前兆を示したが、羽化に至ったのは今のところ2例のみで、その他は黒く変色して死亡した。8月までに羽化2例、死亡15例、変化なし5例となり、生存の可能性の強い最後の5例は10月現在も変化を見せず越冬そして来春の羽化が期待される。なお、今までの羽化前兆は全て橙色班が現れたので♂と思われる。現在保管中の5例については結果が出そろった時点で追って報告するつもりである。蛹の死亡原因は不明であるが、同じ条件で保管している野外産ツマキチョウの蛹4頭はいずれも生きている(と思われる)。

<雑交F1>

第1例は♂の翅であることはわかるが、全く伸展していないので形態を解釈出来ない。

第2例は前者に比べれば翅は伸展しているがそれでもひどい状態である。これによってわかることは、橙色は、*A. cardamines* の範囲より若干小さめで前翅端の黒班は *A. scolymus* に近いが色調はずっと淡いということ。そして中室外側の黒点は基部方向に凸の三角形で *A. cardamines* のものよりはるかに大きく、*A. scolymus* のものよりはやや小さいということ。橙色班の色調も *A. cardamines* よりやや淡く、両者の中間と言って良いと思われる。翅形その他に関しては伸展不良などのため調べていない。

<まとめ>

A. cardamines ♀ × *A. scolymus* ♂ の組み合わせにより雑交を試みた。母蝶は53卵産卵し81.1%という比較的良好なフ化率をみたが、幼虫期の死亡率は48.8%と非常に高く、また蛹化後もそれを上回る死亡率である。幼虫期の経過は、平地における *Anthocaris* の飼育経過と差はなく、ほぼ2週間で蛹化するが、蛹化後の経過にはばらつきが大きく14日で羽化に至った例もあれば、10月になっ

でも変化の現れないものもある。今までに羽化した2例はいずれも♂の不全羽化で蛹期は14日と20日であった。班紋は Parentsの中間的性質が強い。羽化前兆を示しながら死亡したのも全て♂の橙色班を現した。現在5つの蛹が変化なしのまま越冬しようとしている。

<あとがき>

この試みに対して貴重なアドバイスを下さった近藤先生に感謝と敬意を表したい。読者の中からユキワリツマキチョウの完全羽化をはたしてくれる人が現れば幸いである。写真希望の方は御一報を。

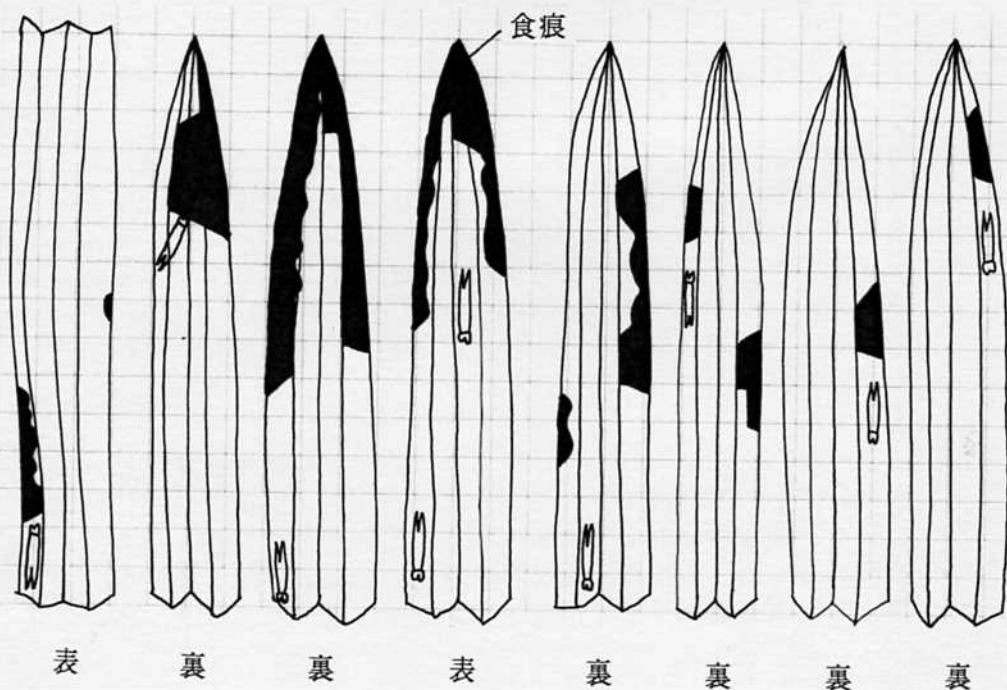
1984年10月20日

早春のオオヒカゲ

松井正人

4月22日の調査報告であるがなぜ4月22日が早春かといえば、1984年は大雪で4月15日になってようやくギフチョウが飛び出した年である。調査地も冬期にはかなりの積雪があり、雪が融けたばかりのスゲ田ではたしてオオヒカゲの幼虫が見付かるかどうか調査したしだいである。

調査地は金沢市松根口のかねてよりの発生地で、一面水浸しの中へ長靴で入るとカサスゲの大きいものは、はや20cm位に伸びていた。それらを丹念に捜すと小さな食痕があり、小さな幼虫が付いていた。幼虫の大きさは1.5cm位ですでに分散していた。幼虫は全部で23頭確認したが、多い所では30cm×30cmの枠の中に10頭の幼虫がいた。下図にカサスゲに付けられたオオヒカゲ幼虫の食痕と幼虫の位置を示した。



日帰りで500Km以上走り、4ヶ所で採集を行なうといった途方もない計画を立てた3人組がいた。中西、松井、吉村の3名の計画は、朝5時に金沢を出発、8時過ぎには長野県下に入り、白骨温泉でコヒオドシ幼、松本市内でクロミドリ幼、穂高町でクロツバメシジミ成虫をねらって、最後に白馬村でギフチョウ卵を捜し、夜7時には帰沢しているというもので、時間厳守が最大のポイントだった。

予定通り5月27日朝5時30分に松井宅を出発し、一路平湯温泉を目指した。早朝の41号線は空いていて、黄色線も追い越して8時には安房峠を越えていた。天気は良く安房峠から眼前に見える穂高連峰の尾根は真っ白で、朝日に輝いて見えた。上高地乗鞍スーパー林道は積雪の為通行出来ず、中ノ湯、沢渡経由で白骨温泉に着いた。白骨ファミリースキー場のイラクサの草むらに入ってみると、コヒオドシの巣はすぐに見付かった。辺りを見渡すと多数の巣がある。まだフ化したばかりで、巣内に幼虫がいるかどうかははっきりしないものも多数あった。1つの巣内に30~50匹幼虫がいることを考えると、無数の幼虫がいることになる。寄生率が非常に高いというので、2令幼虫を選んで採集した。餌にするイラクサ採取には、予め用意しておいた軍手を使ったが、手が傷々になってしまった。ここで採集したコヒオドシは下界では成長が早く、金沢で7~10日で蛹となってしまう更に1週間ほどで羽化した。個体には寄生はなく非常に小型でヒメコヒオドシと呼ぶにふさわしいものだった。

先を急ぎ10時には松本市原に到着、小高い丘にクヌギの大木がずらりと並んでいる。クロミドリシジミの終令幼虫は、クヌギの樹皮のシワに入って昼間は静止しているというので捜してみると、これも簡単に見付かった。背丈位の高さで十分に見付かるというのだが、スパイク靴着用の中西、松井氏は上の方まで上り、樹皮をなめまわすように幼虫を探し大成果をあげてしまった。しかし、ここの終令幼虫は寄生率が高く成虫になったのはわずかであった。

つぎにクロツバメシジミを捜すべく、梓川の梓橋詰の河原を歩いてみたがツメレンゲが見付からず、以前松井氏がツメレンゲを確認している鳥川べりに向かった。午後1時過ぎに鳥川べりの自動車学校横に到着。ここでも簡単にクロツバメシジミをネットしてしまった。ミヤマシジミ、ツバメシジミもチラチラ飛んでいたが、裏地の黒っぽさですぐに区別できた。工場横には芽の出たばかりのツメレンゲが無数にあり、その様はまさにゴルフボールであった。このゴルフボール状の芽は、去年の花の枯れたあとが棒のように立っており、遠くからでもすぐ見付ける事ができ、数個持ち帰ったところフ化した幼虫が摂食を始め、簡単に飼育個体も手に入ってしまった。クロツバメシジミ雄はほとんどボロで、大きめの雌はみな完品だった。

穂高町を後にした一行は給油後一路北上した。仁科三湖、青木湖を過ぎて間もなく白馬到着。細野でギフ卵を捜したがこれがなかなか見付からない。ギフ

男の松井氏が、ミヤマカンアオイ葉裏より3卵塊40卵程度採集したのみ。4時30分には信濃森上駅前に到着し、休憩後ひたすら金沢目指して走った。7時過ぎには無事松井宅に到着。500Km以上の走行はそんなにひどくはなかったが、明かるうちに家に着くという目標はかなりのプレッシャーであった。

筆者にとってこれだけポイントをあたり、大漁旗をかかげたのは初めてであった。ネズミ取りにも引っ掛からず、最良の日、最長の日であった。

採集データ	1984年5月27日	松井、中西、吉村採集
長野県南安曇郡奈川村白骨温泉		コヒオドシ幼 250exs
“ 松本市原		クロミドリシジミ幼 60exs
“ 南安曇郡穂高町		クロツバメシジミ 40exs
“ 北安曇郡白馬村細野		ギフチョウ卵 40exs

(数はおよそで示した。)

ゼフむだ話(4) 採集禁止

野 中 勝

僕はゼフが好きである。そして成虫か卵かを問わなければ日本産のゼフ全種を自らの手で採集している。大した事ではないだろうが、少し位自慢したいところである。ところが大声では言いにくい事情がある。問題になるのはチョウセンアカシジミ。陸中でも小国でも確か採集禁止の種。自ら採ったというのは違法行為を犯したことを認めることになるのである。常々これはうっとうしい話であると思っていた。そこへ去年の富山のクモツキ騒ぎ、今年になって日本のマスコミをあげてのヤンバルテナガコガネフィーバーと、ムシの採集禁止ということに関しては納得がいかない事件が続いたので、この際この問題についての意見を述べてみたい。

世間一般の常識では密猟者=悪人、監視人=正義の見方という図式が何の抵抗もなく受け入れられている様であるが、僕はこれに大いに疑問をいだいている。先ず確認しておきたいのは、我々は基本的には蝶を含めてどの様なムシをも採集する権利を持っているということである。もちろん採集方法などには自ずから制約があるはずで、チェーンソーで他人の所有物であるウラジロガシの大木を倒して、ヒサマツの採卵をするといった事が許される筈はないが、一般的にはムシ採り自体が他人に迷惑をかけることはほとんど考えられず、その範囲内でムシ屋は自由にムシを採って良いと思われる。その例外が天然記念物指定→採集禁止という処置である。つまり採集禁止処置というのは、ムシ屋が有するはずの自由にムシを採集するという基本的権利に加えられた制限なのである。そうである以上、この処置にはそうせざるを得ない十分な科学的根拠が存在しなければならぬはずで、僕が問題にしたいのはまさにこの点である。身近な例で富山県のクモマツマキをとりあげてみよう。全く迷惑なことに、こ

の種は同県の天然記念物に指定され採集を禁止されているという。僕は不勉強にして、どの様な法律にどの様な文面でこのことが明記されているか知らないが、その目的は「クモツキを産しない石川県のムシ屋に意地悪をする為」などであるはずはなく、「クモツキを保護する為」となっているに違いない。問題はこの点である。はたして採集禁止にしなかった場合、マニア(僕はもちろんその一人だが)の乱獲によりクモツキが絶滅あるいは減少するという根拠があるのだろうか？僕はもちろんマニアの採集がクモツキの発生に及ぼす影響を述べられる程この種とのかかわり合いは深くないが、乱獲がそう簡単には蝶の絶滅や減少に結びつかないことを証明する例としては、石川県のアサマジミをあげることができる。1980年白山スーパー林道の蛇谷大橋付近で、本種の発生地が発見された。翌年から今年に至るまで、我が百万石蝶談会のマニア共はここにおしかけ幼虫を乱獲している。採集方法たるや文字通り草の根をわけて幼虫を探し、更に2回、3回と時期をずらして波状攻撃をかけるという徹底的なもので、翌年の事を考えて一部を残しておくなどという事はしていない。にもかかわらず、ここの幼虫の数は数年たっても一向に減る様子はない。別にこれは何の不思議も無いことで、我々が手を出せるのは道に接した岸壁の極く一部であり、ナンテンハギは道の上下の岸壁にも沢山生えており、そこで発生した成虫が道沿のナンテンハギにも飛来して産卵するといったことが、毎年繰り返されているからに違いない。従ってここのアサマジミを絶滅させる為には多数の岩登りのエキスパートを動員して、岸壁という岸壁にザイルを張りめぐらす必要があるだろうが、そうまでしてここのアサマジミを採り尽くしたいと思う人はいないだろう。更に、もし誰かがこの絶滅作戦を実行し首尾よく成功したとしても、それでは蛇谷の一発生地点がつぶれるにすぎない。尾添水系に点々と存在するアサマジミの発生地を総てつぶすことは、とてもマニアごときの手におえることではないだろうし、発生環境さえ破壊されずに残っていたら、一部の産地で絶滅しても長い年月の間には回復してくると思われる。立山のクモツキが白山のアサマと全く同一に論じられないことはもちろんであるが、僕には両種の発生環境は非常に良く似ている様に思われる。つまりクモツキは採集禁止にしてマニアの手から守らなくても、減少する心配の無い種なのではないだろうか？先に述べた如く、僕はこのことについて科学的なデータを提出することはできないが、データを提出しなければならないのは採集行動に制約を受けるマニアの側ではなく、他人の自由を制限しようとする側だろう。是非誰もが納得するような具体的なデータを明示してもらいたいものだ。といったところでそんなデータが出てくるとはとても思えない。僕が見るところでは、天然記念物の指定は大した根拠もなく、「皆が採りに来るから貴重な蝶なのだろう。ならば天然記念物にして保護しよう」位のいい加減な理由でなされたに違いない。そういう事をするアホな役人共に今更何もうつつもりはないが、僕が問題にしたいのは、その際に相談を受けたであろう、又現在役人共の手先になってクモツキシーズンには土、日を返上して監視に当たっているという富山県の虫屋さんである。少しでもムシと接している人なら、クモツキの

発生に及ぼす影響は採集者の乱獲などより、称名に駐車場が作られた際に行なわれた様な、発生環境の破壊の方がはるかに大きい事は容易に分かるはずである。そういった大きな問題には何ら有効な反対運動を行わず、密猟者を取り締まって喜んでいるなどというのは、僕から見れば単なる自己満足で、真面目にクモツキの保護を考えている人の行為とはとてもおもえない。どんな事で自己満足を得ようと各人の勝手であろうが、「他人の自由を制限して」というのだけは止めてもらえないだろうか？ 富山県の虫屋さんはアサマジミを含む数種を天然記念物に追加指定しようとしているという。一体、ここ数年の間に富山県に於けるアサマジミの分布の一部を明らかにしてきたのは誰だと思っているのだ。外ならぬ我々、石川県のマニア共のはずだ。その間に富山県の虫屋さん達はといえば、虫屋であることを放棄して、虫を追わずにもっぱらクモツキの密猟者を追っていたのだ。それが分布のほんの一部が判明したからといって天然記念物にして、採集を禁止してしまおうというのは一体どういうつもりだろう。富山県のアサマの分布はどう考えてもかなり広そうだし、これからまだまだ新産地が発見される筈である。その全体像を把握しないまま、合法的な調査（いやな言葉だが、意味することは我々マニアが蝶欲しさに新産地を求め歩くという健全な行為）を不可能にしてしまうなんて僕は反対である。そもそも天然記念物にする根拠がないではないか。貴重さからいえば、数の少なさからも形態の特異さからも白山のアサマには遠く及ばない。それに絶滅の心配も、白山のアサマでさえ乱獲により絶滅する可能性はないのに、ド普通種の立山のアサマには全くないといってよい。僕が言いたい事は一言、「バカな事は止めろ！」である。今あなた方がすべき事はアサマの追加指定ではなく、クモツキの指定解除なのだ！

富山県の虫屋の悪口ばかり書いてしまったが、石川県の虫屋だって似た様なものである。僕もその会員になっている石川県のさる昆虫同好会の例会での、不愉快なやりとりを記しておこう。会長？「富山県では何種かの蝶を天然記念物に指定しているが、ウチでもギフチョウでも指定しないか？ 最近、県外からずいぶん採集にきているというし。」 会員A？「でも残念ながら、ギフチョウはまだまだ沢山いますからね。」 会長（いかにも残念そうに）？「そうか…」 一体ギフが沢山いることを残念がっているこの人達は何を考えているのであろうか。昔日の関東の様に次々と破壊されギフがほんの一部に追いやられる日を待っているかの様である。そうしたら採集禁止の立て札でも作って、嬉しそうな顔をして監視に当たるのだろうか？ こういった下劣な人種とはかかわり合いになるだけでバカらしく、無関係にすませられればそれに越した事はない。僕も一時、採集禁止になっている種などとは一切かわらぬにしようと思った事がある。しかし良く考えてみればこれは無理な話なのである。さっきから見えてきた様に、天然記念物に指定されている種というのは、その表向きの理由が「絶滅に瀕しているから」であらうが、「学術的に貴重な…」であらうがそんなのはたいていウソッパチで、本当の理由は「マニアが欲しがらるから」なのである。欲しい種を採集しない蝶マニアなどというものが存在しうる筈はなく、従っ

てこれら一部の種の採集禁止というのは、実は蝶の収集という趣味全体に対する否定なのである。我々はもう少し真剣にこの事を考えても良いのではないだろうか？ 不当な採集禁止処置に対して密猟で対抗するだけでなく、正面からその不当さを主張していくことも必要なのではないだろうか？ とにかく、何の科学的根拠もないいい加減な法律によって、この健全な趣味を捨てさせられるのなんてまっぴらである。

—— 同姓同名ではなかった ——

—— チョウキチホマレ ——

一部の方に話をした事があり、あーあの事かと思われるかも知れないつまらん内輪話を一つ。

筆者の従弟に嵯峨井建(タツルと称する)というのが京都の下鴨神社に務めている。押水町の本家の次男坊で30ウン才まで独身であったが縁があってバタバタと結婚の話がまとまり挙式の運びとなった。結婚式は京都で挙げられ一族に招待状が送付された訳だが、その相棒が村山修一長女となっておりどこかで聞いたことのある名だと思ひ、まさかあの村山修一氏とは同一人物だとは信じられないことなので、シャバには同姓同名の人もいるもんだなとさして気に止めずにいた。その後本家へ行く機会があり、村山修一なる人物について本家の長男(従兄)に聞いてみると、名古屋の愛知学院大学の教授で専門は考古学ということだった。この時点でもまだ別人と思っていた訳だ。チョウキチの親父殿が招待され式に参列のため京都まで出向いた。数日後、記念写真が送られ恰幅のいい新婦の父であるという姿を見てやっと同一人物だと解った次第である。

村山修一氏とは1950~1960年代にかけて「蝶と蛾」や「昆虫と自然」に盛んに投稿されており、著名な方である。(特に台湾、中国、ロシア物が多い。)どこの世界にもあるようにその論文発表はいろいろとりだたされ、一部ひんしゅくをかっていることは当時まだ蝶に全く無知だったチョウキチにも覚えがある。外界に100人の敵ありの言葉通り、批判論がある事自体がその人間に対する関心度が大なる証拠であるが、ここしばらく村山修一の名前がいろんな書物に出てこないのですっかり忘れていたが(これを読んだら村山氏大いに怒ることであろう)1984年11月号の「昆虫と自然」③1に久方振りに執筆されているのを読んだ。冒頭…「著者の浅学から誤りを犯したところがあるかもしれないので、お気付きの方は御好意ある御叱正を賜わりたく…」というくだりはいささか低姿勢ではあるが、その健筆振りには我従弟の姑御というヒイキ目に見て誠に嬉しい存在である。

先般、従弟の口から村山氏に「僕のイトコにもチョーチョを集めているのがいますよ！」と伝わったらしく「是非一度いらっしゅい」という招待があった。村山氏の邸には蝶の仲間がやはり毎日のように入れ替わり立ち替わり集まっているようで、その時の氏の顔色は我々が蝶を語る時と同じくイキイキしているという。家族の方の話の又聞きではあるが、蝶の仲間の来客の際にはお茶も出さないそうである。なぜならば、時間かまわずの傍若無人の虫客にはいつまで

もつきあっておられず、一つの撃退方法なのだそーな。でもそんなことぐらいでは関西の虫屋は誰も帰らないそうです。そういえばチョウキチ宅も最近チョーチョの仲間が来客してもお茶が出てこないという声がきかれるが…ハハハ。ほんとうにつまらん内輪話で失礼しました。

㊦1 村山修一(1984):最近中国から発見された新しい蝶類
昆虫と自然(19)12:24~27 ニューサイエンス社

——— お知らせ ———

TTS昆虫図書(旧東京通販サービス社)より在庫目録の送付を受けている人は知っていると思うが、新刊図書の目玉品を2つお知らせする。

1. 日本産カミキリ大図鑑

2~3年前より予約の受付までして何をしていた、カミキリ界待望のカミキリ大図鑑が大難産の末ようやく誕生の運びとなった。日本産全670種(2146頭の個体写真)を今までにない鮮明なカラー写真で図示してあるといわれる。全属全種についての県別・島嶼別の分布図が付けられているらしいが、果たして石川県産はどのように塗られているのでしょうか?

昭和59年11月26日発売、定価38000円(分割39500円)A4版568頁、講談社刊。発売されれば、井村会長、野中、松井幹事が購入する筈だから見せてもらうこと。

2. 日本産蝶類文献目録

本書も数年前より発行が噂されていたが、'85年3月刊行予定となった由。26年前の1958年にも日本産蝶類分布表という目録が発行されている。いつ、何処で、誰が、どんな報告をしているか? というキャッチフレーズ通りであれば、至極索引検索がやり易いものであると思われる。著者は、旧版、新版とも九州大学教授白水隆博士。

予価10000円、B5版、本文500頁、索引20頁。北隆館発行

目 次

1. ユキワリツマキチョウ飼育記録(中間報告).....	金 平 永 二(1)
2. 早春のオオヒカゲ	松 井 正 人(4)
3. The longest day <長野県縦断採集記>	吉 村 久 貴(5)
4. ゼフむだ話(4)採集禁止	野 中 勝(6)
5. 同姓同名ではなかった	チョウキチホマレ(9)

期 NO. 49

1984年12月26日(水)発行

発 行 金沢市大場町東871の15 松井正人方 百万石蝶談会

編集・校正 松 井 正 人